

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論 文 題 目

中国の大学専攻日本語教育の研究
—文学思想による規定と日本の国語教育からの影響—

申 請 者

田中 祐輔

2013年 2月

中国の大学専攻日本語教育の研究
—文学思想による規定と日本の国語教育からの影響—

論文目次

序章	1
1. 研究の背景	3
1-1. 中国の大学専攻日本語教育	3
1-2. 中国の大学専攻日本語教科書	4
1-3. 現代的課題としての「ニーズ」に対応した「適切な教材」の必要性	5
1-4. 根本的な問題は果たして「ニーズ」なのか	6
2. 問題の所在	7
2-1. 国語教科書との近似性	7
2-2. 教科書内容の経年変化から浮かび上がる教科書作成の意図	8
2-3. 固定化をもたらす要因とは何か—中国の日本語教育は何を目指して来たか—	8
3. 研究の目的	9
4. 研究の方法	9
4-1. 共時的・通時的研究の必要	9
4-2. 6つの研究手法	10
4-2-1. 教科書分析	11
4-2-1-1. 本研究の対象と取り扱う「日本語教科書」の定義	11
4-2-1-2. 調査・分析の対象教科書	12
4-2-2. アンケート調査	14
4-2-3. インタビュー調査	15
4-2-4. 既存研究の言説分析	16
4-2-5. ドキュメント調査	21
4-2-6. 公式統計調査の二次分析	22
5. 本研究の構成	22
6. 初出一覧	24
7. 本研究の倫理上の立場	25
8. 凡例	25

9. 研究助成	28
第 I 部 中国日本語教育六十年史—大学専攻日本語教育を中心に—	29
第一章 黎明期・揺籃期	33
1. 研究の背景	35
2. 問題の所在	37
3. 研究の目的	37
4. 研究の方法	37
5. 結果—中国大学専攻日本語教育史（黎明期・揺籃期）—	38
5-1. 黎明期：国外情勢受信と将来の国家建設のための日本語人材養成（1949-1963）	38
5-1-1. ロシア語中心の「人材貯蓄」型外国語教育施策	39
5-1-2. 「外国老专家」の貢献	41
5-2. 揺籃期：海外との交流を想定した準備と中断（1964-1971）	45
5-2-1. ロシア語中心から多言語重視へ	45
5-2-2. プロレタリア文化大革命後期の日本語教育	47
5-2-3. 「翻訳中心」型日本語教育と社会状況を反映する日本語教科書	49
6. まとめ	51
第二章 復興期・確立期	53
1. 研究の背景	55
2. 問題の所在	55
3. 研究の目的	55
4. 研究の方法	56
5. 結果—中国大学専攻日本語教育史（復興期・確立期）—	56
5-1. 復興期：民際外交と国交回復前夜の日本語人材養成（1972-1977）	57
5-1-1. 国交正常化と民際外交の高まりによって起きた「第一次日本語ブーム」	57
5-1-2. 目が向けられ始めた「聴く」「話す」能力	57
5-1-3. 高等教育機関における日本語教育の整備と再出発	62
5-2. 確立期：外交・貿易のための日本語教育（1979-1989）	64

5-2-1. 「第二次日本語ブーム」と日本語教育事業の活発化	64
5-2-2. 日本からの教師派遣の活発化	69
5-2-3. 日本からの図書寄贈の活発化	71
5-2-4. 大学専攻日本語教育と日本語教科書の在り方の模索	73
6. まとめ	75
第三章 成長期・成熟期・転換期	77
1. 研究の背景	79
2. 問題の所在	79
3. 研究の目的	79
4. 研究の方法	80
5. 結果—中国大学専攻日本語教育史（成長期・成熟期・転換期）—	80
5-1. 成長期：コミュニケーションのための日本語教育（1990-1999）	81
5-1-1. 官学連携による教材開発・試験実施	81
5-1-2. 日本語専攻『教学大纲』の制定	81
5-2. 成熟期：多様化する日本語教育と異文化理解（2000-2010）	84
5-2-1. 基礎段階『教学大纲』改訂・高年級段階『教学大纲』制定・高校日语 专业四级・八级考试实施	84
5-2-2. 学習者の「ニーズ」への視座	87
5-2-3. より広く捉えられる「日本語能力」—「複合型」日本語人材の育成と 異文化間交流の提唱—	88
5-3. 転換期：既存パラダイムの変革が求められる日本語教育	93
5-3-1. 変質する日本語学習熱	94
5-3-2. 急務とされる教育内容や教材、教授法の改革	97
6. まとめ	99
第Ⅱ部 中国大学専攻日本語教育の内容・手法の固定化—日本語教科書と国語教科 書との近似性—	103
第四章 大学専攻基礎段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較 —作品・作家を中心に—	107
1. 研究の背景	109

2. 問題の所在	111
3. 研究の目的	112
4. 研究の方法	112
5. 結果	114
6. 考察	118
7. まとめ	118
第五章 大学専攻高年級段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—作品・作家を中心に—	121
1. 研究の背景	123
2. 問題の所在	123
3. 研究の目的	124
4. 研究の方法	125
5. 結果	126
6. 考察	129
7. まとめ	129
第六章 1960年代から1980年代の日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—作品・作家を中心に—	131
1. 研究の背景	133
2. 問題の所在	133
3. 研究の目的	134
4. 研究の方法	134
5. 結果	137
5-1. 書き下ろし作品・日本語原文掲載作品・中国語原文翻訳掲載作品	137
5-2. 日本語原文掲載作品と国語教科書との重なり度合い	140
5-3. 作品・作家の重なり度合い（年代別）	141
5-4. 日本語教科書に掲載されることの多い作家と作品	142
5-5. 教科書作成に際し参照されることの多い出典	143
6. 考察	144
6-1. 1970年代までの掲載文章種別ごとの役割	144

6-2. 各時代の社会や文化を色濃く反映する掲載作品と 1980 年代の転換	145
6-3. 参照元の年代別の特徴	145
6-4. 1960・1970・1980 年代の日本語教科書と国語教科書との関わりの特徴と 変遷	146
7. まとめ	147
第Ⅲ部 「日本語教科書」が包摂する「国語教科書」—異同と役割—	149
第七章 高年級段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—文章 の様式・題材・年代を中心に—	153
1. 研究の背景	155
2. 問題の所在	155
3. 研究の目的	155
4. 研究の方法	156
5. 結果	159
5-1. 取り扱われる作品の様式	159
5-1-1. 高等学校国語科を連想させる各様式の比率（「評論」「随想」「小説」 「古文」が 74%）	160
5-1-2. 各様式に広く分布する「国語教科書重複作品」	161
5-2. 取り扱われる作品の初出年	161
5-2-1. 1970 年代・1980 年代・1990 年代に発表された作品が全体の半数	162
5-2-2. 初出年が古い作品ほど、「国語教科書重複作品」の割合が高い	162
5-3. 取り扱われる作品の題材	163
5-3-1. 作品の題材は「文学」が圧倒的な割合を占める	163
5-3-2. 「文学」を題材とする作品の 7 割以上が「国語教科書重複作品」	164
6. 考察	165
6-1. 現行教科書掲載文章の様式的特徴	165
6-1-1. “様式”としての「文学」は半数に満たない	165
6-1-2. “題材”としての「文学」が大半	165
6-1-3. 二重の偏りも考慮した作品選定の必要性	167
6-2. 現行教科書掲載文章の年代的特徴	168
6-3. 現行教科書掲載文章の題材的特徴	168

7. まとめ	169
第八章 1960年代から1980年代の日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—文章の様式・題材・年代を中心に—	171
1. 研究の背景	173
2. 問題の所在	173
3. 研究の目的	174
4. 研究の方法	174
5. 結果	177
5-1. 取り扱われる作品の様式	177
5-2. 取り扱われる作品の題材	179
6. 考察	180
6-1. 文章の種別による作品の特徴	180
6-2. 日本語教科書出版年代による作品の特徴	182
6-2-1. 過去の教科書の様式的特徴 (1960年代・1970年代・1980年代)	184
6-2-2. 過去の教科書の題材的特徴 (1960年代・1970年代・1980年代)	185
7. まとめ	186
7-1. 様式	186
7-1-1. 1960年代「随想」「小説」「民話」(小学校の国語教科書)	186
7-1-2. 1970年代「対談・座談」「紀行・記録」「伝記」(書き下ろし・中国語原文翻訳)	187
7-1-3. 1980年代「評論」「解説・鑑賞」「随想」(中学校の国語教科書)	187
7-2. 題材	187
7-2-1. 1960年代「文学」「言語」	187
7-2-2. 1970年代「文学」「歴史」	188
7-2-3. 1980年代「文学」「言語」	188
第九章 高年級段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—設問を中心に—	191
1. 研究の背景	193
2. 問題の所在	194

3. 研究の目的	194
4. 研究の方法	195
5. 結果	199
5-1. 教科書の指導内容（設問）の構成	199
5-2. 「語彙」「表現」	201
5-3. 「文法」	202
5-4. 教科書の「設問」	204
6. 考察	214
6-1. 「作者・作品紹介」「注釈」「設問」の3つに集約される国語教科書と、バリエーションのある日本語教科書	214
6-2. 言葉の解釈を重視する国語教科書と、形式を重視する日本語教科書	215
6-3. 国語教科書を包摂する日本語教科書	215
7. まとめ	217

第十章 中国の大学専攻日本語教育における「国語教育を巡る課題」の実態—教育委員会 中国日本語教師派遣事業に関する調査から—

1. 研究の背景	221
1-1. 1970年代末から議論された「国語教育を巡る課題」	221
1-2. 議論の主体とはならなかった当事者達	223
1-3. 引き継がれる国語教育との近似性	223
2. 問題の所在	224
3. 研究目的と方法	224
4. 結果	227
4-1. 「日本語教師」としての役割	227
4-1-1. 「正しい（美しい）日本語」「日本人の心（考え）」の規範	228
4-1-2. 語学教育としての言葉の意味や使い方の説明	229
4-1-3. 日本社会・文化に関する広範な知識・情報伝達	229
4-2. 担当学年・担当科目・使用教材	230
4-3. 「国語教育」と「日本語教育」との狭間で	232
4-3-1. 取り扱う視点の違い	232
4-3-2. 学生の関心や解釈の違い	233

4-3-3. 文化や社会に関する知識・情報の違い	233
5. 考察	234
5-1. 日本語・日本文化・日本社会の規範の伝達者	234
5-2. 担当は主に高年級段階	234
5-3. 国語教育と日本語教育との狭間に生じる“ずれ”	235
6. まとめ	235

第IV部 中国の大学専攻日本語教育の内容と手法を規定して来た要因とは何か…… ……………239

第十一章 現代中国における日本語教育言説史—学術誌『日语学习与研究』の言説分析から— ……………243

1. 研究の背景	245
1-1. 固定化されて来た中国の大学専攻日本語教科書	245
1-2. 「日本語教科書」が包摂する「国語教科書」—様式は「評論」「随想」「小説」中心・題材は「文学」中心・古典文学や漢文も—	245
1-3. 中国における日本語教育言説	246
2. 問題の所在	247
2-1. 日本語教育の内容と手法を規定して来た要因とは何か—教育言説の切り口から—	247
2-2. 中国の教育思潮を分析した先行研究	247
2-3. 日本語教育言説は何を語って来たのか	248
3. 研究の目的	249
4. 研究の方法	249
5. 結果	255
5-1. 区分「日語教学」の論文数の推移と背景	255
5-2. 執筆者の所属機関の地域分布	256
5-3. 研究対象とされる段階	257
5-4. 研究類目	258
5-5. 研究分野	261
5-6. 「日本語教育が目指したもの」の変遷	262
6. 考察	264

6-1. 日本語教育言説が活発化した 1990 年代初頭……………	264
6-2. 執筆者は北京、遼寧、吉林、上海の大学専攻日本語学科の教師が半数を 占める……………	265
6-3. 研究対象は大学専攻・非専攻の日本語教育が 6 割強を占める……………	265
6-4. 刊行当初から設けられて来た研究類目—「日本語学」「日本語教育学」「翻 訳学」「文学」「日中対照言語学」「日本文化研究」—……………	265
6-5. 日本語教育を取り巻く状況や研究動向と共に盛衰が見られる研究類目— 「文法研究」「日本外来語研究」「類義語研究」「音声研究」「古典・短歌・ 俳句」「近現代文学の翻訳」「科学技術や経済、新聞読解」「敬語と修辞」 —……………	266
6-6. 学術誌が必要に応じた情報の配信と共有の役割も担う……………	266
6-7. 1980 年代末から見られる研究分野の多様化……………	267
6-8. 関わりを持たない主張が共存する言説空間……………	267
7. まとめ……………	268

第十二章 中国の大学専攻日本語教科書の現代史—日本語教科書と国語教科書との近似性 と包摂関係を支える教育思想—……………

1. 研究の背景……………	273
1-1. 複数の主張が共存する中国の日本語教育言説……………	273
1-2. 理論と実践の乖離に対する批判……………	273
2. 問題の所在……………	274
3. 研究の目的……………	274
4. 研究の方法……………	274
5. 結果……………	275
5-1. 文学作品に託された言葉と文化の最高表現形式としての役割……………	276
5-2. 日中関係の深化に伴う高度日本語人材養成の必要性和国語科教師派遣の影 響……………	279
5-3. 中立性・合理性・普遍性・規範性を見知から導入された国語教科書……………	280
5-4. 高等学校母語教育段階（国語科）に照準が合わせられた第二言語教育の到 達目標……………	282
5-5. 慣習化した国語教育・国語教科書……………	283

6. 考察	284
6-1. 中国の大学専攻日本語教科書を規定して来た要因—教科書の内容を規定する文学主義思想—	284
6-2. 文学主義を後押しした日中関係深化に伴う高度日本語人材養成の必要性和教師派遣	285
6-3. 中立性と合理性、普遍性、そして規範性の側面から拠り所とされた国語教科書	285
6-4. 到達目標としての高等学校母語教育段階（国語科）	286
6-5. 国語教育・国語教科書の定着による慣習化	286
7. まとめ	286
第十三章 中国の大学専攻日本語教育における言語教育と文学教育との関わり	289
1. 研究の背景	291
1-1. 中国の大学専攻日本語教科書の固定化と 5 つの要因	291
1-2. 言語教育と文学教育との関わりに関する議論	292
1-2-1. 日本の日本語教育の場合	292
1-2-1-1. 1960年代の高等教育機関における日本語教育の拡大と学術研究のための日本語	292
1-2-1-2. 「多様化」する日本語教育と「日本語教育の専門性」の追求の中で批判された「文学」・「国語」	294
1-2-1-3. 多言語多文化共生社会における共生のための日本語	296
1-2-2. 日本の英語教育の場合	299
1-2-2-1. 「実用性」の観点から批判された文学	299
1-2-2-2. 「コミュニケーション」能力育成には適当ではないと批判された文学	301
1-2-3. 国語教育の場合	302
1-2-3-1. 戦中・戦前への反省から起きた言語経験主義	302
1-2-3-2. 活動主義から言語能力主義の国語科教育へ	304
1-2-3-3. 日本語教育という視座からの問い直し	305
1-2-3-4. 国際学力調査からの問い直し	307
1-2-3-5. 継続される文学教育と批判	307

2. 問題の所在	308
3. 研究の目的	308
4. 研究の方法	309
5. 結果	309
5-1. 戦前に日本の国語を学んだ人々によって築かれた礎	309
5-2. 1980年代に定着した文学教育への考え方	311
5-3. 国語教育の内容や手法を用いることへの批判	311
5-4. 問題とされた文学教育	312
5-5. 基礎段階『教学大纲』が制定された1990年—コミュニケーションと言語能力主義へ—	313
5-6. 基礎段階と高年級段階の棲み分けが顕著となる2000年代—高年級段階に温存された文学—	316
5-7. 高年級段階における文学教育の位置づけ	318
5-8. 高年級段階の『教学大纲』と日本の高等学校の国語科『学習指導要領』	320
5-9. 四級・八級『考试大纲』から見る基礎段階と高年級段階との棲み分け	320
5-10. 担当教員から見る基礎段階と高年級段階との棲み分け	323
6. 考察	329
6-1. 最初期から重視され1980年代に普及した文学教育	329
6-2. 言語教育としての日本語教育への着目と文学批判	329
6-3. 言語能力主義の基礎段階と文学主義の高年級段階	330
6-4. 分断された基礎段階と高年級段階—「日本語教育」と「国語教育」—	330
7. まとめ	331
終章 結論	333
1. 結論	337
1-1. 中国の大学専攻日本語教育の現代史的背景	338
1-2. 中国の大学専攻日本語教科書の固定化—国語教科書との近似性—	339
1-3. 固定化の実態—国語教科書との包摂関係—	340
1-4. 国語教育の内容・手法を用いることへの批判	341
1-5. 固定化を起こした5つの要因	341
1-6. 「日本語教育」と「国語教育」とを目指す中国の日本語教育—基礎段階と高	

年級段階に設けられた線引きと断絶—	343
1-7. 包括的研究から浮かび上がる大学専攻日本語教科書／教育が胚胎する問題	345
1-7-1. 文学教育への偏重がもたらす弊害	346
1-7-2. 基礎段階と高年級段階との分断による教育のさらなる硬直化	347
1-7-3. 「国語」という目標の実現不可能性	350
1-8. 中国の大学専攻日本語教科書／教育の課題と展望	351
1-8-1. 「基礎段階」「高年級段階」の枠組解体と日本語教育そのものを問い直す必要性	351
1-8-2. 求められる教科書研究と教育思想史研究	352
2. 本研究の独自性と成果	355
3. 今後の課題	356
あとがき	359
巻末資料	
日本語教育年表	360
謝辞	364
参考文献	368
表の一覧	400
図の一覧	402

本研究は、過去から現在にかけ、現代中国の大学専攻日本語教育の教育内容や手法が固定化されている実態を指摘し、これまで潜在的だった種々の要因を顕在化させ、現行の日本語教育が抱える問題点や限界点を解決する糸口を見出すことを目的とするものである。そのために、中国の日本語教育でこれまで使用されて来た日本語教科書の特徴や作成基準・背景・変遷を調査・考察し、中国の日本語教育が何を教育目標として掲げ、教科書を通して、どのような日本語教育を目指して来たのかを明らかにする包括的な日本語教科書の史的研究を行った。

本研究は第Ⅰ部～第Ⅳ部までの4つの部と、13の章によって構成されている。序章において、研究の背景、問題の所在、研究の目的、研究の方法、本研究の構成、初出一覧、本研究の倫理上の立場、凡例、研究助成、について述べた。第Ⅰ部（第一章・第二章・第三章）では、第Ⅱ部・第Ⅲ部・第Ⅳ部における議論への足場を築くために、現代中国日本語教育60年史の歩みを概観し、大学専攻日本語教育が持つ歴史的背景を把握した。第Ⅱ部（第四章・第五章・第六章）では、1960年代から現在にかけて発行された主要精読日本語教科書の固定化について、国語教科書との関わりという視点から分析・考察した。第Ⅲ部（第七章・第八章・第九章・第十章）では、日本語教科書と国語教科書との異同の詳細、及び、両者の役割について論じ、日本語教科書と国語教科書との包摂関係について指摘した。第Ⅳ部（第十一章・第十二章・第十三章）では、日本語教科書が国語教科書との近似性・包摂関係を保つ形で固定化されて来た要因について考察した。終章では、第Ⅰ部から第Ⅳ部までの研究で得られた結論と、中国の大学専攻日本語教科書と日本語教育の現代的課題、今後の展望について述べた。巻末には、「日本語教育年表」「参考文献」「表の一覧」「図の一覧」を掲載した。

以下に、研究の背景、問題の所在、研究の目的、研究の方法、研究の結果、結論、今後の課題について述べる。

1. 研究の背景

1-1. 中国の大学専攻日本語教育と日本語教科書

現在、中国の日本語学習者数は約83万人と報告されており（国際交流基金，2011）、その増加は著しく、日本語能力試験海外受験者数は世界で最も多い（国際交流基金・日本国際教育支援協会，2011）。中でも高等教育機関で学ぶ学習者が多く、学習者全体の約7割を占め、また、世界の高等教育機関で学ぶ学習者の過半数が中国の学習者となっている（国際交流基金，2011）。

現代中国の高等教育機関における日本語教育は、中華人民共和国設立直後から北京大学、洛阳解放军外语学院、郑州信息工程学院において開始されていたが、本格的に進められたのは

1960年代であり、規模の拡大が始まるのは、1970年代に入ってからである。当時、日本語教科書に掲載された主な文章は、中国事情を日本語で紹介した『人民中国』の記事や、中国の文学作品を日本語に翻訳したものなどであり、日本のものは小林多喜二のプロレタリア文学作品や日本共産党関係者の手記などが掲載されるに留まっていた（牧田，1979）。その後、1978年の日中平和友好条約や、1979年の日中文化交流協定の調印と改革开放政策によって、市場経済体制への移行だけではなく対日開放政策も進められたことや、「四个现代化」の一環として、日本の科学技術や社会システム、文化といったあらゆる方面への情報収集、及び研究活動が活発化したことなどから、高度日本語人材養成が急務となり、教育体制や、教育内容、教育手法など、さまざまな面からの改革の必要性が指摘された。中でも、シラバスや学習内容が体现された教科書の変革は重要視され、各大学や出版社、研究機関で作成が進められた（曹，2008）。

1-2. 現代的課題としての「ニーズ」に対応した日本語教科書

日本語教科書に関する議論は、これまでも、取り扱われる文章の内容や形式、年代、文法、語彙、設問など、さまざまな角度から活発に行われて来た。例えば、竈・李（2000）、王（2004）は精読用日本語教科書の掲載文章について日本の言語や文学に関する古典的名著だけではなく、新聞や現代小説、エッセイといった文化や社会を反映するものからも積極的に引用する必要があると指摘している。取り扱われる作品の年代に関する指摘もある。倪（2006）は、「時代性が欠如した使用教材」と題して「社会情勢と日本語教育の変化を反映していない問題点がある」「内容も古く実務性に乏しい」（p.38）と指摘しており、劉（2008）は、教科書制作者側が、前例に倣いながら一方的に題材選びを行っている現実があると指摘している。田中・伊藤・王・肖・川端（2010）では、学習者は、現代日本の理解を目標としているため、より多様で動態的な情報を提供出来る情報媒体として教科書を構成すべきであると述べられている。

取り扱われる文章の様式、題材、年代など、さまざまな角度から課題が指摘され、多様化する学習者のニーズに合わせた主教材・副教材の開発が急務であると述べられているのである。

1-3. 根本的な問題は果たして「ニーズ」なのか

先行研究による指摘は、日本語教科書の在り方を考える上で重要な示唆に富むものであるが、これまでに、このような現行教科書の不備を指摘した研究者側の声が広く聞き入れられ、現場で使われる日本語教科書の内容の刷新に繋がることはほとんどなかった。換言すれば、教師や学習者へのアンケート調査やインタビュー調査を用いた「ニーズ」調査は、日本語教科書が“ニ

ーズに対応していない”という問題を指摘するに留まっており、それが、日本語教科書や日本語教育の根本問題の特定や、教科書内容の抜本的改変に、必ずしも結びついて来なかったと言えるのである（田中，2010）。

近年、「ニーズへの対応」が無批判に教育の命題とされることの危険性が指摘されている（細川，2007）。また、「学習者ニーズ」だけでなく、「教師ニーズ」「機関ニーズ」「社会ニーズ」といった「ニーズ」の多面性（吉岡，2011）や、定義自体も時々によって揺れ動いる実態（田中，2012b）も明らかにされている。さらに、十分な議論がなされないまま、学習者の多様化を根拠としたニーズへの対応が正当化され教育的価値が無条件に付与されてしまっている問題（牛窪，2012）も指摘されている。そもそも、「ニーズ」というものは本来、学習者数の増加や社会情勢に応じて多様化するのが当然のものであって、過去の教材開発者達はその事実を単なる怠慢によって見落として来たとは考えにくい。そうであるならば、「ニーズ」のみを追い、教科書の内容が「ニーズ」の多様化に対応していないこと自体を問題と見なす手法ではなく、むしろ、ニーズの多様化への対応が行われずに固定化され続けて来たのはなぜなのか、という問いを立て、その根本要因を特定するために、さまざまな観点から現象を掘り下げて調査・分析して行く複眼的な研究手法が必要であると考えられる。

2. 問題の所在

2-1. 国語教科書との近似性

現在、中国国内で広く使用されている日本語教科書の内容的特徴について把握し、複数の研究者によって指摘されている現行教科書の問題の所在を探るために、筆者は精読用日本語教科書の調査を行った。精読は、大学専攻日本語教育のカリキュラムの中心を担う主幹科目とされている。時間数が最も多く、大学専攻日本語教育を象徴する科目であることと、精読の教科書自体が、大学専攻日本語教育の教育内容や手法を如実に反映していることから、複数の先行研究において研究の対象とされて来た。本研究も、同様の立場から、精読用日本語教科書を対象にした。調査の結果、中国国内で使用されている日本語教科書の掲載作品・作家は、基礎段階・高年級段階共に日本の国語教科書との重複が見られ（田中，2011c）、特に高年級段階では、作品が国語教科書に掲載されたものと一致する度合いが極めて高いことが明らかになった。また、ほとんどの日本語教科書は、掲載作品の作家が国語教科書に掲載されたものと一致する割合が高いことが明らかになった（田中，2012a）。

この結果を見れば確かに、先に挙げた先行研究で指摘されているように、日本語教科書掲載

作品は学習者のニーズを第一に考えて選定されているとはいいがたく、国語教科書の内容を安易に踏襲しているようにも思える。2009年12月に筆者などが実施した学習者に対する調査(計53名に対する合計23項目のアンケート調査)結果からも、現行日本語教科書に対し、学習者が不足や疑問を抱いていることが明らかとなっている(田中・伊藤・王・肖・川端, 2010)。

2-2. 教科書内容の経年変化から浮かび上がる教科書作成の意図

中国国内で使用されている日本語教科書の掲載作品の大半が国語教科書掲載作品と重なるに至った経緯を明らかにするため、過去に使われていた日本語教科書にも視野を広げ、1960年代から1980年代までに発行された主要精読教科書計についても調査を行った。その結果、国語教科書との内容的近似性は、過去の教科書にも見られる特徴であることが明らかとなった。さらに、1960年代以降の日本語教科書について、国語教科書掲載作品と重複する作品の特徴の詳細を調べたところ、年代ごとに、重複する国語教科書が小学校・中学校・高等学校とに、それぞれ異なることが明らかとなり、各時代の大学専攻日本語教育の目標が、日本の国語科の学習段階に基づいて設定されていたことが示唆された(田中, 2012c)。

2-3. 固定化をもたらす要因とは何か—中国の日本語教育は何を目指して来たか—

そこで、中国の大学専攻日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因について明らかにするために、1960年代から現在の間に関与した大学専攻日本語教育に携わった教師に対するインタビュー調査結果と、『教学大纲』や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書から考察した。結果、日本語教科書と国語教科書との類似は、学習ニーズの把握やそれへの対応を怠った結果と言うよりも、明確な意図のもと、意識的に選択・編纂された結果であることが示唆された(田中, 2012e)。そして、この意図とは、中国の日本語教育の中で広く共有されて来た教育目標から生じたものであり、それは、深く教育思想に根ざした「中国の日本語教育が目指して来たもの」であるという仮説を立てることが出来る。

以上より、中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、何よりもまず、過去から現在にかけて、国語教科書との近似性を保つ形で内容が固定化され続けて来たのはなぜなのか、という問いを立て、その根本要因を特定する必要があると考えられる。そして、そのためには、これまで使用されて来た日本語教科書の特徴や作成の基準・背景・変遷を調査し、中国の日本語教育が何を教育目標として掲げ、教科書を通して、どのような日本語教育を目指して来たのかを明らかにする必要があると考えられる。

3. 研究の目的

本研究は、過去から現在にかけ、日本語教科書の内容が固定化され続けて来たのはなぜなのかという問いを立て、その根本要因を特定するために、中国の大学専攻日本語教育が辿って来た変遷や経緯、目標について、日本語教科書を中心とした史的研究を用いて共時的・通時的に明らかにすることにより、これまで潜在的だった種々の要因を顕在化させ、現行の日本語教育が抱える問題点や限界点を解決する糸口を見出すことを目的とする。

4. 研究の方法

日本語教科書の特徴や作成基準・背景・変遷を調査・考察するためには、教科書そのものだけでなく、中華人民共和国建国時期から現在までを広く捉え、教科書の実態とその利用者、教科書が利用される環境、教育言説を対象とする必要がある。なぜなら、現行日本語教科書の内容は、利用者や利用される環境、そして、長年にわたる現代中国日本語教育史の中で起きたさまざまな事象や事情を背景とする多面的、動的なものであるからである。そこには、(a) 教育現場における潜在意識や慣習に規定されるという社会的側面、(b) 内容が時々々の時事や政治に左右されるという政治的側面、(c) 特定のイデオロギーの影響を受けるという意味での思想的側面、などが存在する。純粹、且つ何からも隔離された教科書というものはいないのであり、たとえ現在利用されている教科書について考える場合でも、その特徴と課題の根本要因を明らかにするためには、さまざまな側面について、過去から現在に至る経緯も踏まえた考察をせざるを得ず、共時的・通時的研究が必須となるのである。そこで、本研究では主に次に挙げる6つの研究手法を用いて分析・考察する。

(1) 教科書分析

現代中国の日本語教科書の特徴について、1960年代から2010年代までに発行された日本語教科書計51冊(現行の基礎段階教科書20冊・現行の高年級段階教科書17冊・過去の教科書14冊)の内容(掲載文章と設問)を量的・質的に分析する。

(2) アンケート調査

学習者が日本語教科書とどのような関係にあり、どのような考えを抱いているのかについて明らかにするために、学習者を対象に行った調査(対象:大学日本語学科学学生計53名/2009年12月実施。調査は23の質問項目を記した調査紙を用いて実施した)。学習者の学習動機、日本語学習に求めるもの、教科書についての考え、日本語学習についての考え、の分析を行う。

(3) インタビュー調査

日本語教科書がどのような経緯で作成・選択・利用されて来たのか、時々の状況はどのようなものであったのかについて明らかにするために、1960年代から現在までの間に大学専攻日本語教育に携わって来た計29名の教師に対するインタビュー調査を実施し、個々の経験と考えから発話されたデータをもとに考察を行う。

(4) 既存研究の言説分析

日本語教科書作成の意図や背景を明らかにするために、どのような議論が展開され、それらは日本語教科書とどのような関係にあったのかについて、今日までの変遷を明らかにする。具体的には、中国の日本語教育の主要学術誌である『日语学习与研究』に掲載された日本語教育に関する論考(計199)の言説分析を行った。それぞれの論考の課題、目的、主張、発行年、分野、執筆者の所属機関所在地を、分析・コード化し、それぞれの年にどのような人々によって、どのような課題について、どのような主張がなされていたかについて考察する。

(5) ドキュメント調査

中国の日本語教科書とその背景の歴史の変遷について明らかにするために、中国の日本語教育について記された行政府資料、大学や民間機関所蔵資料、雑誌・新聞記事、書籍、日記の分析を行う。

(6) 既存研究や公式統計調査の二次分析

教科書が固定化されて来た要因と背景を探るために、1949年から現在にかけて行われて来た大学専攻日本語教育の変遷を把握する取り組みとして、大学専攻日本語教育について論じた既存研究や事例、及び、日中の官公庁や民間団体が発表した公式統計調査を参照し、二次分析を行う。

5. 研究の結果

5-1. 中国の大学専攻日本語教科書の固定化—国語教科書との近似性—

第I部では、中華人民共和国設立以後の日本語教育について、(1)ドキュメント調査、(2)既存研究分析、(3)インタビュー調査、(4)公式統計調査の二次分析を用いて調査を行い、「黎明期・揺籃期」、「復興期・確立期」、「成長期・成熟期」、「転換期」の各時期における背景と目的、教師、学習者を取り巻く状況の変遷を把握した(第一章・第二章・第三章)。

第II部では、中国の大学専攻日本語教科書の特徴について明らかにするために、現行教科書

(基礎段階・高年級段階日本語教科書計 37 冊) と日本の国語教科書との関わりという視点から調査を実施した。結果、中国国内で広く利用される精読用日本語教科書は、国語教科書との内容的近似性を持つことが明らかとなった(第四章・第五章・第六章)。特に、高年級段階では、作品が国語教科書に掲載されたものと一致する割合は最も高い日本語教科書で 88%を示し、17冊のうち12冊の日本語教科書が50%以上の重なりを示すことが明らかになった。また、作家が国語教科書に掲載されたものと一致する割合は、17冊全ての日本語教科書が50%以上の重なりを示しており、最も高いもので100%の重複を示すことが明らかになった(第五章)。1960年代から1980年代までに発行された主要精読教科書計14冊についても調査を行ったところ、国語教科書との内容的近似性は、文化大革命の影響を受けた1970年代を除くほぼ全ての時期に見られ、1960年代に発行された日本語教科書は小学校の国語教科書と、1980年代に発行された日本語教科書は中学校の国語教科書と、1990年代以降に発行された現行日本語教科書は高等学校の国語教科書との重なり割合が高く、各時代の大学専攻日本語教育の目標が、国語科の学習段階に基づいて設定されていた可能性があることが明らかとなった(第六章)。

5-2. 固定化の実態—国語教科書との包摂関係—

第Ⅲ部では、国語教科書との近似性を保つ形で固定化された日本語教科書について、具体的に国語教科書とどのような関係にあるのか、その異同と両者の役割について調査を行い考察した。まず、高年級段階の日本語教科書の内容的特徴を、掲載された作品の様式と年代、文章の題材の三つの観点から分析した。結果、(1) 掲載作品の様式では、「評論」「随想」「小説」といった近現代の作品が大半を占めていること、(2) 文章の題材については、全体の62.7%が「文学」となっており、そのうち、7割強は「国語教科書重複作品」であり、(3) 高年級段階の日本語教科書に至っては、小説や随想、評論文だけではなく、古典文学や漢文といったものも取り扱われ、大半が高等学校の国語教科書から引用されていることが明らかとなった(第七章)。次に、過去の日本語教科書についても調査を行ったところ、(1)～(3)の特徴は近年に近づくにつれ、より顕著になって来たことが明らかとなった(第八章)。さらに、現行教科書の設問に着目した調査を行い、中国の大学専攻日本語教育において主幹科目とされる精読科目の高年級段階日本語教科書と国語教科書との比較・分析を行った結果、掲載作品・作家が全く同じものでも、その指導の方法については、完全に同じではなく、日本語教科書は、国語教科書を参照する過程で、日本語教育の『教学大纲』で示されている学習到達目標や教育方針、そして日本語教育の対象の特徴などを十分に考慮していることが明らかとなった。日本語教科

書は、目的や対象が異なる国語教科書を取り込むために、国語教科書の完全な複製ではなく、加筆修正を施しながら、国語教科書を包摂する形で編纂されているのである（第九章）。

5-3. 国語教育の内容・手法を用いることへの批判

しかし、1980 年前後から教育現場では、第二言語としての日本語の教育は国語教育とは異なるため、高等学校国語科教諭などが国語教育の内容・手法で教えることは問題であると指摘されるようになった。当時、批判の矢面に立たされた高等学校派遣の国語科教諭（1979 年から現在までに派遣された教師 19 名）へのインタビュー調査から、実際に中国の大学で日本語教育に携わった国語科教諭がどのような役割を期待され、どのような内容で教育を実践し、具体的にどのような課題に直面していたのかについて調査し考察を行った。結果、（1）教師に求められる役割、担当学年、科目によって派遣教師の専門性を活かすことが出来るもの（主に高年級段階）と、そうではないもの（主に基礎段階）とがあること。具体的には「正しい（美しい）日本語」「日本人の心（考え）」の規範を示すことが主眼に置かれた科目では国語教育の内容や手法を用いることが可能だが、語学教育としての言葉の意味や使い方の説明を要する科目には不具合が生じていた。（2）現地では「（1）」に述べた派遣教師の適性を考慮した科目設定がなされており、基本的には、国語教育の内容や手法で教えることが求められて来たこと。

（3）但し、全く同一であるわけではなく、観点の違いや、学生達の関心や意識の違い、扱う必要のある知識や情報の違いによる課題も存在し、各人が対応を試みたり、事業全体で課題が共有されたりして来たこと。以上の 3 点が明らかとなった（第十章）。

5-4. 固定化を起こした 5 つの要因

国語教育の内容や手法を用いて日本語教育を行うことに批判がありながらも、なぜ、固定化が続くのだろうか。第 IV 部では、その要因について調査と考察を行った。まず、学術誌『日語学习与研究』に掲載された中国の大学専攻日本語教育について論じた教育言説を対象に、これまで、どのような教育言説が展開され日本語教育として何が目指されて来たのかについて調べた。結果、（1）日本語教育言説が活発化したのは 1990 年代初頭からであり、その時期は基礎段階の『教学大纲』が制定され、機関数も増加する時期であったこと。（2）論考の執筆者は早い時期から高等教育機関における日本語教育が進められていた北京や、日本語教育が盛んな吉林、遼寧、天津、山東、江蘇などの沿岸部諸都市の大学に所属する教師が中心であり、研究対象は、高等教育機関における日本語教育が 6 割強を占めていること。（3）刊行当初から論

じられていた研究類目は「日本語学」「日本語教育学」「翻訳学」「文学」「日中対照言語学」「日本文化研究」であること。(4) 日本語教育を取り巻く状況や研究動向、或いは編集委員会の担当者によって盛衰が見られる研究類目は「文法研究」「日本外来語研究」「類義語研究」「音声研究」「古典・短歌・俳句」「近現代文学の翻訳」「科学技術や経済、新聞読解」「敬語と修辞」であること。(5) 日本語教育に関する研究分野は1980年代末から多様化していること。(6) 日本語教育に関する主張や目標、提言については次のような特徴があることが明らかとなった。1980年代初頭には、「文学作品を用いた日本語教育」が重視され、1980年代中頃には、「コミュニケーション能力」育成の必要性やそのための「文化理解」の重要性が指摘されていた。1990年代前後には国家建設のための日本語教育が提言され、科学技術や研究に関する日中の相互交流を支える日本語教育によって「四个現代化」に貢献するべきであると主張された。1990年代後半になると、「学習者中心」「学習者重視」が指摘され、2000年代初頭には研究型人材の育成や、「社会ニーズへの対応」として情報化社会とグローバル社会に適応した人材育成が目指された。さらに、「教養力」として、人文学の教養を有する人材の育成が目指される。2000年代中盤から、「学習者主体」「学習者主導」が出現し、さらに、「複合型人才」「日本語+ α 人材」が提唱され、これまで以上に「総合的・総合性」が重視され、近年では、「文化理解」「コミュニケーション能力育成」「ビジネス日本語」といったものも出現している。一見関わりを持たない主張や目標が混在している様子が見て取れる。以上である(第十一章)。

多様な教育言説が出現しながらも、現行の教育内容・手法で固定化されていることには一見矛盾を感じてしまうが、むしろ、そうした矛盾が生じない考え方があるという仮説を立て、考察を行うこととした。それには、教科書の内容を強く規定して来た考えや価値観、目標や社会状況、時代背景を、思想という形で顕在化させ、分析することが求められると考え、1960年代から現在の間には大学専攻日本語教育に携わった教師29名に対するインタビュー調査結果と、『教学大纲』や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書から考察した。

結果、中国の日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因として、(1) 日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考を文学作品の内に見出し、古典文学から近現代文学までを学ぶことを重視する教育思想が教師間、『教学大纲』、研究者間で広く共有されて来たこと。(2) 1970年代の日中関係の深化が高度な日本語人材養成を急務とし、教師派遣や国語教科書の流入を後押ししたことで、当時検討されていた古典文学も含めた文学教育の実施を可能とし、最も手近であった日本の国語教科書が用いられたこと。(3) 高度な外国語人材の到達目標としては、その国の高等学校における母語教育科目を修了した程度が目

安とされ、教材としては高等学校の国語教科書掲載作品が適当と考えられたこと。(4) 国語教科書掲載作品は、中立性と合理性、普遍性、そして規範性という面から、中国の大学専攻日本語教育の教材として妥当であると考えられたこと。(5) 高等学校の国語教育の内容・手法が中国の日本語教育現場で長年用いられることによって定着し、慣習化したことも日本語教科書の内容を規定する一因となっていること。以上の5点が明らかとなった(第十二章)。

5-5. 「日本語教育」と「国語教育」とを目指す中国の日本語教育—基礎段階と高年級段階に設けられた線引きと断絶—

古典文学から近現代文学までを学ぶことを重視する教育思想については、他の言語教育にも見られる現象であるため、それら他言語との比較においてどのように位置づけられるのかを明らかにするために、日本の日本語教育と国語教育、英語教育、そして、中国の日本語教育における言語教育と文学教育について論じた論考を中心に、各種議論を整理した。結果、日本の日本語教育や英語教育では「実用性」「コミュニケーション」「生活言語」の観点から文学作品を教育に用いることは重視されてはおらず、中国の大学専攻日本語教育の状況は日本の国語教育の状況に最も近いことが明らかとなった(第十三章)。

さらに、文学教育についての考え方がどのように共有されたのか、そして、それは中国の大学専攻日本語教育について考える際に何を示唆するかについて調査した。結果、(1) 中国の大学専攻日本語教育では、1949年の開始直後に一部機関において帰国華僑や日本への留学経験者、或いは、日本の旧植民地などで国語として日本語を学んだ教師によって文学教育(古典文学を含む)も行われ、文学教育の重要性が説かれていたということ。(2) 本格的に全国で実施されるようになるのは日中関係が深化する1970年代末であり、文学教育を必修にすべきであるという主張が研究会などでもなされ、日本からの派遣教師事業の活発化が普及実現を後押ししたこと。こうした中、(3) 文学教育を中心とした教育への批判や、国語教育の内容や手法を用いることへの批判が起こり、1990年代になると言語教育としての日本語教育への変革の機運が高まり、文学教育への強い反対を生むこととなったこと。しかしながら、(4) 言語教育の色合いが強い基礎段階の『教学大纲』の改訂と、新たに高年級段階の『教学大纲』が設置されることによって両者の棲み分けが生じ、文学教育重視の考え方は高年級段階に温存され、高年級段階の教育目標・内容は日本の国語教育のそれに共通する部分があること。(5) 中国の大学専攻日本語教育における言語教育と文学教育との関係に関する議論は、日本の国語教育における議論と近似していること。(6) 『教学大纲』に基づいて実施されている大学専攻

四级考试・八级考试の構成と内容、或いは、担当教師からも、基礎段階と高年級段階とは明確な棲み分けが生じていることが分かり、中国の大学専攻日本語教育における文学重視の思想からは、中国の大学専攻日本語教育が基礎段階と高年級段階とに分断されていることが示唆されること。以上の6点が明らかとなった（第十三章）。

6. まとめ—結論と今後の課題—

以上の研究結果から得られた結論を簡潔にまとめれば、現代中国の大学専攻日本語教育には、「文学思想」とも言える文学重視の考えが根強く存在し、特に高年級段階は教育の目標、内容、手法について日本の「国語教育」の強い影響を受ける形で固定化されて来た側面を持つ。そして、このことが、日本語教育そのものを基礎段階と高年級段階とに大きく分断し、高年級段階への移行過程に位置づけられた基礎段階もまた、硬直化の煽りを受ける結果を招いたことが指摘出来るのである。

こうした大学専攻日本語教育の実態から浮かび上がる問題として（1）文学教育への内容的な偏重による弊害が生じていること。さらに、（2）基礎段階と高年級段階とが分断されたことで、教育の目標や内容、手法の硬直化が保持されてしまう構造が生じていること。そして、（3）日本語・日本文化の規範性の過度な追求には不可能性が付き纏うこと。以上が指摘出来る（終章）。中国の大学専攻日本語教育は、前提となる基本的な理念や価値観自体に問題を抱えており、新たな価値を創出しなければならない段階にあると言えるのである。

問題解決には、現代中国の教育思想にまで掘り下げた深い考察が必要であり、現代中国の日本語教育が何を目指すべきであるのかについての活発な議論が不可欠であると筆者は考える。こうした日本語教育そのものを問い直す取り組みの中で、教科書研究と歴史研究は極めて重要である。教科書は、大学専攻日本語教育で学習すべき内容が盛り込まれた図書とされ、教科書の内容には中国の大学専攻日本語教育の目標や指導内容が凝縮されている。もちろん、教科書研究で明らかになったことは、最大限インタビュー・アンケート調査や文献調査などで多角的に検証する必要があるが、教育実践に対し教科書の果たして来た役割が大きい（秦，2002）以上、教育の実態を明らかにし、その根本から問い直したい時、教科書研究は必要不可欠なものであると考えられるのである。また、歴史研究についても極めて重要であると考えられる。特に、（1）育成方法の転換、（2）育成目標の転換、（3）育成内容の転換、という3点から、現在の日本語教育が大きな「転換期」を迎えている現在（修，2012：5）、これまで自明のものとされて来た方法や内容、方針では立ち行かなくなったということは、それぞ

れの教師や学習者、教育現場が新たな思想や進むべき方向について議論することが喫緊の課題とされているということでもある。但し、留意しなければならないのは、いかなる議論によっても、無から有が生じることはないということである。現在の日本語教育が、過去の事象の積み重ねによるものである以上、新たな思想は、日本語教育の「歴史」を踏まえた通時的な思想史研究の視野なしに形成し得ないであろう。中国の大学専攻日本語教育のこれからを考えるにあたっては、部分的な対象の限定された問題を取り上げ、性急に目先の打ち手を見つけようとするのみでは不十分なのである。とりわけ、中国の日本語教育が「転換期」にあり、教育の実態を明らかにした上で日本語教育の思想を通時的に問い直し、新たな価値を検討することが急務である今日、教科書研究と教育思想の歴史的研究は、今後の日本語教育研究において、より重要な研究領域になって行くと考えられる。

課題も残されている。第一に、本研究で明らかとなった思想的要因が、個々の実践においてどのように作用するのかについて、今後、教室活動を始めとする個別の実践事例に深入りし、詳細なプロセスを理解する必要がある。第二に、中国の日本語教育における文学重視の考えがどのような経緯で思想形成されて行ったのかについて、別途研究課題を立て、調査したい。そのためには、中国の教育思想史全体に視野を拡大させることや、周辺国・地域との接触による影響も含めた考察が求められることだろう。第三に、本研究の結果からは、教育思想や中国の大学専攻日本語教育の目標は、ある特定の地域や機関に所属する人々や、影響力を持つ人々によって言語化され、普及して行く傾向が強いことが分かっている。特に、「黎明期」や「復興期」において、歴史に名を残す指導者が登場しており、教育思想や日本語教育の在り方を示す語り手であったことが分かる。彼らの語りを分析することは、新たな思想や進むべき方向について議論する際に、有益な知見を供することになるであろう。一部の回想録や文献において既に触れられているものもあるが、今後、インタビュー調査と資料収集によって、個々人の体験や回想、個別の案件についての証言を、日本語教育思想の歴史として再構成する必要があると考えている。

いずれも筆者自身の今後の課題とし、今後の取り組みを通じて得られた調査結果を総合し、中国の日本語教育に関わる計画の策定・推進のプロセス、及び、個々の実践において教育思想が果たす役割を明らかにして行きたい。そして、その上で、今後の実践的知見を取りまとめることを目指したい。

参考文献

- 牛窪隆太（2012）教育実践に位置づけられた学習者ニーズの課題—『日本語教育』掲載論考の検討から—『多摩留学生教育研究論集』8，電気通信大学国際交流推進センター，1-9
- 王婉莹（2004）日语专业低年级精读课教材分析『清华大学学报』19，96-99
- 倪鏡（2006）中国における日本語教育について—高等教育日本語専攻を中心に—『日本地域政策研究』4，日本地域政策学会，33-39
- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』凡人社
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会（2011）『日本語能力試験結果の概要』凡人社
- 修剛（2012）中国における大学の日本語教育の課題と教材開発「中国における新しい日本語教材の開発を語る」中国大学日本語教材シリーズ完成記念公開研究会，於：国際交流基金日本語国際センター
- 秦耕司（2002）中国の日本語教育-教科書を通してみる第二外国語教育-『調査と研究』33(1)，長崎県立大学国際文化経済研究所，51-66
- 曹大峰（2008）中国における日本語教科書作成一歩み・現状・課題—『言語文化と日本語教育』35，お茶の水女子大学日本言語文化学会，1-9
- 田中祐輔（2010）论体现“学习当事者需求”的教材开发支援网站的构建——为了适应多样化学习需求的综合日语教材开发『日本研究集林』35，复旦大学日本研究中心，99-106
- 田中祐輔・伊藤由希子・王慧隽・肖輝・川端祐一郎（2010）中国の日本語専攻大学生に対する日本語教科書の課題—学習者への学習状況調査を通して—，杨俊峰（主編）『大学外语研究文集』11，长春出版社，362-381
- 田中祐輔（2011c）关于中国大学日语专业基础阶段教科书与日本中小学国语教科书的比较研究—两者内容异同中所浮现的当代性课题—『日本研究集林』37，复旦大学日本研究中心，32-42
- 田中祐輔（2012a）中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題『リテラシー』10，くろしお出版，21-30
- 田中祐輔（2012b）日语教育学中“需求”论的实体与当代课题——对《日本語教育》学术理论的考察『日本研究集林』38，复旦大学日本研究中心，45-55
- 田中祐輔（2012c）中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷—『国語教育史研究』13，国語教育史学会（受理済印刷中）
- 田中祐輔（2012e）中国の大学専攻日本語教科書の現代史—日本語教科書が包摂する「国語教育」に付与された教育思想的役割—（日本中国学会第六十四回大会口頭発表，於：大阪市立大学）
- 窦文・李庆祥（2000）高年级日语精读课教材的内容、结构、规模『山东师大外国语学院学报』4，93-96
- 細川英雄（2007）日本語教育学のめざすもの—言語活動環境設計論による教育パラダイム転換とその意味—『日本語教育』132，日本語教育学会，79-88
- 牧田英二（1979）最近の日本語教育の動向—'76.4-'78.2 上海『中国研究月報』371，中国研究所，29-35
- 吉岡英幸（2011）日本語教材から見た日本語能力観『早稲田大学日本語教育研究』，早稲田大学大学院日本語教育研究科，1-7
- 劉玉茹（2008）中国四川省・西華大学日本語教育事情（特集：中国の教育）『大学教育』5，山口大学大学教育機構，21-33

早稲田大学 博士（日本語教育学） 学位申請 研究業績書

[学位論文・学術論文・著書・その他（学会発表等）の順に記入してください]

氏 名 田中 祐輔 印

(2012年12月20日現在)

学位論文

1. 松本亀次郎の日本語教材と国語合理化論—日本語教育の「国際化」とナショナリズム 2009
早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文

学術論文

1. 金義泳・趙南星・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎（2008）「海外における日本語読解教材の役割—韓国人学習者のための読解教材の作成プロセスの記述と共有」『実践研究からの発信—記述・分析そして共有へ—』（教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム〈予稿集〉），日本語教育学会，167-170頁.
2. 田中祐輔・伊藤由希子・王慧雋・肖輝・川端祐一郎・復旦大学学生実践調査員（2010）「中国の日本語専攻大学生に対する日本語教科書の課題—学習者への学習状況調査を通して」楊俊峰（主編）『大学外语研究文集』11，大连外国语学院日本語学院，362-381頁.
- 3. 田中祐輔（2010）「论体现“学习当事者需求”的教材开发及其支援网站建设」『日本研究集林』35，复旦大学日本研究中心，99-106頁.
4. 田中祐輔・張玥（2011）「学習ニーズの多様化に対応する日本語教材開発の取り組み—復旦大学日本語学習状況調査による『学習当事者ニーズ』の検討とその効果」『言語と文化論集』17，神奈川大学外国語学研究科，169-185頁.
- 5. 田中祐輔（2011）「对中国大学日语专业基础阶段教材与日本中小学国语教材的比较研究—内容异同所体现的现代性课题」『日本研究集林』37，复旦大学日本研究中心，32-42頁.
- 6. 田中祐輔（2012）「中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題」『リテラシーズ』10，くろしお出版，21-30頁.
- 7. 田中祐輔（2012）「日语教育学中“需求”论的实体与当代课题—对《日本語教育》学术理论的考察」『日本研究集林』38，复旦大学日本研究中心，45-55頁.
- 8. 田中祐輔（2012）「中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷—」『国語教育史研究』13，国語教育史学会（受理済印刷中）.

著 書

1. 今井雅晴（編）・金成姫・渡部真由美・田中祐輔・阿部能久・小山聡子・奥津敬一郎・沼田善子・宋協毅（2004）『中国・大連と日本研究』国立大学法人筑波大学第二学群日本語・日本文化学類，全182頁.
2. 今井雅晴（編）・工藤典雄・宋協毅・趙亜平・根岸和時・三根伸太郎・鳴島甫・吉武博通・高田誠・沼田善子・杉本武・金成姫・濱嶋智衣・田中祐輔・飯田岳士・鄭媛・李研研（2005）『中国・大連の筑波大学—日本語・日本文化学類の出張講義—世界の中の筑波大学1』国立大学法人筑波大学第二学群日本語・日本文化学類，全229頁.

その他

《学会発表》

1. 田中祐輔 (2007) 「松本亀次郎の日本語教材に関する研究—国語教育から日本語教育への転身と変容」 (口頭発表), 早稲田大学日本語教育学会2007年秋季大会, 2007年10月13日, 於・早稲田大学 (東京) .
2. 金義泳・趙南星・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎 (2008) 「海外における日本語読解教材の役割—読解教材の作成プロセスの記述と共有」 (口頭発表), 日本語教育学会2008年度実践研究フォーラム, 2008年8月3日, 於・早稲田大学 (東京) .
3. 田中祐輔・川端祐一郎 (2008) 「地域日本語教室のレゾンデートル「『必要性』から『費用対効果』へ」—財団法人茨城県国際交流協会つくば支所が主催する日本語教室の事例から」 (口頭発表), 早稲田大学日本語教育学会2008年秋季大会, 2008年9月13日, 於・早稲田大学 (東京) .
4. 田中祐輔 (2009) 「松本亀次郎・岡本千万太郎の日本語教材と国語合理化論—日本語教育の『国際化』とナショナリズム」 (口頭発表), 早稲田大学日本語教育学会2009年春季大会, 2009年3月28日, 於・早稲田大学 (東京) .
5. 田中祐輔 (2009) 「日本語教育現場の今—中国復旦大学における私の『実践』『研究』を通して—」 (口頭発表), 早稲田大学日本語教育学会2009年秋季大会, 2009年9月12日, 於・早稲田大学 (東京) .
6. 田中祐輔 (2009) 「日本語教育現場の今—研究とのズレはあるのか」 (パネルディスカッションパネリスト), 早稲田大学日本語教育学会2009年秋季大会, 2009年9月12日, 於・早稲田大学 (東京) .
7. 田中祐輔 (2010) 「学習者による日本語教材開発と活動支援システム構築の試み—中国復旦大学日本語科『精読 (総合日本語)』クラスにおける副教材開発プロジェクト」 (口頭発表), 2010年度世界日本語教育大会 (ICJLE), 2010年8月1日, 於・国立政治大学 (台湾) .
8. 田中祐輔・肖輝・伊藤由希子・王慧雋 (2010) 「大学教育としての日本語教育における精読教材のあり方—日本の多様性から中国人大学生の考える力の育成を目指して」 (口頭発表), 第6回中日韓文化教育研究フォーラム, 2010年9月25日, 於・大連外国語学院 (中国・大連) .
- 9. 田中祐輔 (2010) 「学習ニーズの多様化に対応する学習者参加型日本語教材開発—『学び』の問い直しと、継続的なフィードバックループの効果」 (口頭発表), 北京日本学研究中心成立25周年国際学術検討会, 2010年10月17日, 於・北京外国語大学 (中国・北京) .
- 10. 田中祐輔 (2011) 「日本語教育学における『ニーズ』論の現代史—学術誌『日本語教育』(1~147号)の言説分析から」 (口頭発表), 2011年度世界日本語教育研究大会 (ICJLE), 2011年8月21日, 於・天津外国語大学 (中国・天津) .
- 11. 田中祐輔 (2011) 「中国の大学日本語専攻教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題」 (口頭発表), 日本語学会2011年度秋季大会, 2011年10月23日, 於・高知大学 (高知) .
12. 于乃明・田中祐輔・川端祐一郎・肖輝・張玥 (2011) 「学習ニーズの多様化に対応する日本語精読教材の開発—教材開発プロセスに密着して行なわれた学習ニーズの量的・質的調査とその意義」 (口頭発表), 2011年度「台湾日語教育研究」国際学術研討会, 2011年11月26日, 於・静宜大学 (台湾) .
- 13. 田中祐輔 (2012) 「1960年代以降の中国大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との比較調査—掲載作品・作家を中心に—」 (口頭発表), 2012年日本語教育国際研究大会, 2012年8月19日, 於・名古屋大学 (名古屋) .
- 14. 田中祐輔 (2012) 「中国の大学専攻日本語教科書の現代史—日本語教科書が包摂する『国語教育』に付与された教育思想的役割—」 (口頭発表), 日本中国学会第六十四回大会, 2012年10月7日, 於・大阪市立大学 (大阪) .

《翻訳》

なし

《教材》

1. 趙南星・金義泳・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎（2008）『메이겐 독해 일본어1（名言読解 日本語1 中上級編）』다락원（Darakwon），全206頁.
2. 趙南星・金義泳・田中祐輔・飯塚知子・川端祐一郎（2008）『메이겐 독해 일본어2（名言読解 日本語2 上級編）』다락원（Darakwon），全206頁.
3. 庞志春・艾菁・杜勤・沈悦・田中祐輔・杨本明（著）・阪田雪子（監）（2011）『新编职业日语（第三册）』人民教育出版社，全246頁.
4. 《日语阅读训练——通过流行语看日本》编委会（田中祐輔・肖輝・伊藤由希子・王慧雋・川端祐一郎・古賀万紀子・小松知佳・郷亜里沙・山口友里恵・湯本かほり・大内薫子・田中佑・山下悠貴乃・三木杏子・伊藤海彦・津山孔明・甲斐あかり・関田庸介・高橋速水・田中佐二郎・鈴木宙・関谷弘毅・米山裕之・村尾雄太・室岡健志）（編著）・吉岡英幸（監）（2012）『日语阅读训练——通过流行语看日本』外语教学与研究出版社，全216頁+解答（別冊）27頁.
5. 《日语阅读训练——通过流行语看日本（录音版）》编委会（田中祐輔・肖輝・伊藤由希子・王慧雋・川端祐一郎・松本和晃（編）・田中祐輔・川端祐一郎・伊藤海彦・津山孔明・甲斐あかり・関田庸介・高橋速水・田中佐二郎・鈴木宙・関谷弘毅・米山裕之・村尾雄太・室岡健志（著）・尾作亜理紗・大谷美の里・河津雄飛・奥山舜一郎・田中啓太（朗読））・吉岡英幸（監）（2012）『日语阅读训练——通过流行语看日本（录音版）』外语教学与研究出版社，計207分.

研究業績関連説明書

論文1 「中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題」

【要旨】

中国の大学専攻日本語教育において議論される「国語教育を巡る課題」の現状と課題について、中国の大学専攻高年級段階用日本語教科書と、日本の国語教科書との比較調査を行い、(1) 現行日本語教科書の掲載作品・作家は、国語教科書と重複し、(2) その要因は「正しい日本語・日本文化・日本人の心」の習得と理解という目標が、『教学大纲』・教師・学習者・教科書作成者・研究者間に共有され、国語教科書を参照するのが適切且つ効率的だと考えられていることの2点を明らかにした。

【関連】

本論文は、博士論文の第Ⅱ部第五章「大学専攻高年級段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—作品・作家を中心に—」にあたる。本論文で明らかとなった中国の大学専攻高年級段階用日本語教科書と国語教科書との近似性について、さらに、基礎段階用(第四章)、及び過去の教科書(第七章)について調査・考察するもととなった。

論文2 「对中国大学日语专业基础阶段教材与日本中小学国语教材的比较研究——内容异同所体现的现代性课题(邦題:中国の大学専攻基礎段階日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—内容の異同から浮かび上がる現代的課題—)」

【要旨】

中国の大学専攻日本語教育において1970年代末から1980年代にかけて議論された国語教育を巡る課題の現状と現代的課題について、中国の大学専攻基礎段階日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書の比較調査を行い、結果の考察から、現在の大学専攻日本語教育には、国語教育の果たしている役割が確実に存在し、その内容的近似性の実態を把握した上で、今後、大学専攻日本語教育は何を目指し、そのためにどのような学びを構築・展開して行くのかについて再考すべき段階にあることを指摘した。

【関連】

本論文は、博士論文第Ⅱ部第四章「大学専攻基礎段階用日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—作品・作家を中心に—」にあたる。また、本稿は、第五章の高年級段階に関する調査と、第六章の過去の教科書についての調査と対応するものであり、博士論文第Ⅱ部(第四章・第五章・第六章)を構成する柱の一つとなったものである。

論文3 「中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷—」

【要旨】

1960年以降に発行され、中国国内で広く使用された日本語教科書14冊について調査を行い、1960年代に発行された日本語教科書は小学校の国語教科書と、1980年代に発行された日本語教科書は中学校の国語教科書と、そして、1990年代以降に発行された現行日本語教科書は高等学校の国語教科書との重なり度合いが高く、各時代の大学専攻日本語教育の目標が国語教科書の学習段階に基づいて設定されていた可能性があることを指摘した。

【関連】

本論文は、大学専攻日本語教科書と国語教科書との近似性の実態について考察した博士論文の第Ⅲ部第八章「1960年代から1980年代の日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較—文章の様式・題材・年代を中心に—」にあたる。また、本稿は、現行教科書の様式・題材・年代に関する調査(第七章)、設問に関する調査(第九章)を行うきっかけとなったものである。